
バカと天才と音楽家

鍵山雛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと天才と音楽家

【Nコード】

N4044W

【作者名】

鍵山雛

【あらすじ】

それは、文月学園に起こるある波乱・・・
クラスに来たのは天才だった
だけど・・・自分は召還戦争には出られない
昔は頭が悪かった。でも・・・帰って来た彼は天才だった
幼馴染の彼女には思い出して欲しかった・・・
それが・・・自分の願いだから
そのために・・・自分は全てを偽って文月学園に来たのだ
そう・・・幼馴染の木下優子に会うために

あの約束を果たすために

そして・・・約束の曲を奏るために

自分はいるのだから・・・

そう・・・この俺 神山新一 が来たのだから

ブローグ

Dear sisuter
My Shinichi 「koto」 Kamiyama sa
ys that it wants to ask to go
to the school in Japan named t
he educational institution in
July in Japan for giving the sp
lendid graduation at a short p
eriod of only four years as th
e top from MIT M.I.T. <<.

翻訳

拝啓 姉上

私こと神山新一はMIT マサチューセッツ工科大学 を見事にわ
ずか四年という短い期間で飛び級首席卒業したことをお許しください
つきましては日本にある文月学園という日本の学校に行く事をお願い
したいと申します

「はあゝまた日本に帰ることができるのか」
そつ・・・これが今作の主人公神山新一である。

現在・・・飛行機の中

「やばい・・・酔った 気持ちが悪い」

ムードがブチ壊しである

「早く日本に着かないかな　そうだ！C・Aを呼ぼう　すみません」

「はい！お客様　どうかしましたか？」

「気分が悪いので少し寝るので日本に着いたら起こしてくれませんか？」

「わかりました」

そして・・・新一は眼を閉じた

「なあ・・・優子」

「なによ・・・」

「俺・・・来週からアメリカに行くんだ」

「え？何ですよ？」

「このままじゃ優子にふさわしい男になれないから・・・色々鍛えようと思う体と知識を」

「嫌！新一がいなくなるのは嫌！」

「それも困るんだよね　大学からの推薦状が来ていてさ」

「大学？なんで？あんた私よりバカじゃないの？」

新一の心に何かが刺さった

「うー！いやー俺がなんでだろうと言いたいても……どうせ見学とかじゃない？」

「そうだよね……新一が行ける訳が無いもん」

「それは……酷いな」

「絶対そうよー！ー」

「そうだよねー俺がいきなり大学なんてどっかの漫画みたい……」

「漫画のようねえ」

「それじゃあ……また明日」

「また明日ね」

「あ！そうだ……俺のバイオリンの歌詞をやるよ俺の一番得意な奴のそれと俺の鍵を」

「それはいいよ……どうせ私は音楽はだめですよーだ」

「姉上ー何処じゃー」

「ああ……優子の弟かー優子を探しに来たんだろうな」

「秀吉めえ、後で覚悟をしてなさいよ」

「優子……また関節技を決めるのか？」

「でも……その前に」

「その前に？」

「あんたを絞めるわ」

「なんで？」

「私にもっと前に言わなかったから」

「優子、俺の腕はそっちには曲がらないぞ　ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア腕は止めてせめて足に」

「問答無用」

「ギヤアアアアアアアアア」

「あつ姉上どうしてそんな所におるのじゃ？」

「秀吉……助けて」

「すまんのじゃ……新一」

一週間後

「優子これでさよならだな・・・」

「さよならじゃないわよ・・・全く」

「四年たつたらまた帰って来るよ」

「絶対よ私と同じ高校に入りなさい　そして・・・あんたの曲をまた聴かせなさい」

「姉上は全く仕方が無いのう」

「うるさいわよ秀吉」

「姉上わしの関節はそっちには曲がれないぞ　ギャアアアアアアアアアアアア」

「うるさいわよ秀吉の分際で」

「四年後また優子達と共に居られるかな・・・」

「居られる？違うわよ居るのよ！」

「流石・・・優子だ四年後また会おう　俺が恋した幼馴染の優子あつそろそろ時間だ」

「恥ずかしいじゃない」

「絶対・・・優子を見つける！四年後に屋上で自分のバイオリンの音が優子に届くように奏でるように」

そして俺は空港に行きアメリカ行きの飛行機に乗って

「いざ・・・アメリカに うっ気持ち悪い」

ものすごく台無しである・・・

文月学園に新入学（前書き）

やっ
てし
まっ
た

文月学園に新一入学

そして・・・四年の月日が流れ

私・・・木下優子は文月学園二年生である

今日が新一がアメリカに行ってから丁度四年になる

「そして・・・私は色々と変わりました」

「姉上・・・なんじゃ起きておったのか」

「秀吉 なに？私が早く起きて悪い？」

「何でもないのじゃ・・・」

「丁度・・・今日が新一と再会する四年だからね」

「そうじゃな・・・やっぱり新一は姉上と同じＡクラスじゃろう」

「Ａクラスで会えるといいな」

「姉上なんか怖いのが・・・」

「秀吉ちよつとこつちに来なさい」

「ちよ・・・姉上痛いのが」

「うるさい・・・そろそろ学校行くわよ」

「そうじゃな・・・」

「そして・・・私は新一からもらった鍵を首にかけて学校に向かった今日は振り分け試験の日だからだ」

そのころ・・・新一は

「なんで？お前さんがこの学校に入ってくるかね」

学園長室にいた

「何か問題でも？」

「教師として入ってくるのだっいたら分かるがまさか・・・生徒として入ってくるのは予想外だったからな」

「すみません・・・でも極力本気は出しません」

「それでもな・・・どのクラスに入れても圧倒的だしな・・・」

「その問題なら・・・Fクラスでも構いません 最悪・・・生徒指導・学園長の許可がでないと召還ができなくても構いませんから
お願いします」

「私もあんたみたいなのが入ってくれるのは嬉しいんだがね・・・
振り分け試験で4教科合計一万越えは流石に学園長でもどうしようがないよ」

「そこを何とかできませんか？」

「でも・・・MIT主席をFクラスに入れるとなると流石に気が引けるんだよね・・・」

「なら貴方にこの鍵を渡します」

「何だいこの鍵は？」

「私のリミッターを解除する鍵です」

「一体なんだい？そんなものを出して？」

「この鍵が無ければ私は本気になれません力づくでもその鍵が無いと誰もこのリミッターを外すことはできません」

「で・・・その鍵を現在持っているのは私と他には」

「生活指導の西村先生とAクラス木下優子のみです」

「その・・・リミッターを解いたらどうなる？」

「自分の召還獣が現在の点数の状態で召還されます」

「もし・・・その状態になったら？」

「最悪・・・クラスの召還獣の点数が三千点上がります」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あつ・・・でも・・・生徒指導・学園長のどちらかが承認しないと出ませんよ」

「あんたは当分の間試召戦争に関係ある行為を固く禁止する　そして・・・Fクラスに入る事とする」

「わかりました・・・でもクラスに行く前に2つお願いを聞いてくれませんか？」

「なんだい？言ってみな」

「まず一つ召還獣がだめなら西村先生と共に戦死者の補習を手伝ってもよろしいですか？」

「それは構わん」

「もう一つは・・・屋上でバイオリンを演奏することを許可できませんか？　ある人との約束なんです」

「なんだ・・・そんな事かい　そんなこと聞くな毎回好きなだけ引くといい」

「ありがとうございます」

新一は学園長に何回も頭を下げた

文月学園に新一入学（後書き）

どうも・・・最近バカテスとロウきゅーぶに異常にはまっている作者です

これからよろしくお願いします

演奏と屋上と幼馴染（前書き）

問・以下の英文を訳しなさい

This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly

姫路瑞樹の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

吉井明久の答え

「\$ # ー」

教師のコメント

出来れば地球上の言葉で

神山新一の答え

「私の祖母の人生が本棚です」

教師のコメント

どうつつこみを入れるべきか悩めます

問・以下の問いに答えなさい

「goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい」

姫路瑞樹の答え

「good - better - best
bad - worse - worst」

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

「good - gooder - goodest」

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。goodやbadの比較級と最上級は語尾に -erや -estをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

「bad - butter - bust」

教師のコメント

「悪い」「乳製品」「おっぱい」

神山新一の答え

「面白いボケが浮かばない」

教師のコメント

回答にボケは必要ありません

問・下の文章の（ ）に正しい答えを入れなさい。

光は波であって、（ ）である

姫路瑞樹の答え

「粒子」

教師のコメント

よくできました

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

先生もRPGは大好きです。

神山新一の答え

「虫眼鏡を使うと危険」

教師のコメント

それで太陽を見ないでください

問・以下の問に答えなさい

「ベンゼンの化学式を書きなさい」

姫路瑞樹・神山新一の答え

「C6H6」

教師のコメント

簡単でしたかね。神山君は真面目にやりました。

土屋康太の答え

「ベン+ゼン＝ベンゼン」

教師のコメント

君は科学をなめていますか？

吉井明久の答え

「B-E-N-Z-E-N」

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

問・以下の問いに答えなさい

「(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) ? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$? $\sin A \cos B$? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 」

姫路瑞樹の答え

「(1) $X = \pi/6$
(2) ?」

教師のコメント

そうですね。角度を「 $\pi/6$ 」ではなく「 $\pi/6$ 」で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

「(1) $X = \pi/3$ 」

教師のコメント

およそを付けてごまかしたい気持ちも分かりますが、これでは解答に近くても点数は上げられません。

吉井明久の答え

「(2) およそ?」

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを付ける生徒は君が初めてです。

問・以下の問に答えなさい

「女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める」

姫路瑞樹の答え

「初潮」

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

「明日」

教師のコメント

ずいぶんと急な話ですね。

土屋康太の答え

「初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達する頃に初潮を迎える者が多い為、その訪れつ年齢には個人差がある。二本では平均12歳。また、体重

の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される」

教師のコメント

詳しくすぎです。

神山新一の答え

「分かりません」

教師のコメント

君なら簡単なはずだ

問・以下の良いに答えなさい

「人が生きていく上で必要となる五大栄養素を答えなさい」

姫路瑞樹の答え

「脂質・炭水化物・タンパク質・ビタミン・ミネラル」

教師のコメント

さすがは姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

「砂糖・塩・水道水・雨水・湧き水」

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

「初潮年齢が10歳未満の時は早発月経という。また、15歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに18歳になっても初潮がない時を原発性無月経といいー」

教師のコメント

保健体育のテストは1時間前に終わりました。

神山新一の答え

「さっきの問題わかったんだけど言っていない？」

教師のコメント

駄目です

演奏と屋上と幼馴染

「さて、演奏するか・・・」

新一は演奏を始めた

「~~~~~」

「ふう〜 何やってんだろう俺・・・」

「誰もいないと寂しいな〜」

ボタン！！

「！」

「誰よ？みんなが帰っているのに屋上で演奏しているのは？」

突然女子生徒が入ってきた。しかもかなり怒っている

「すいませんでした・・・」

新一は怯えながら頭を下げて謝罪した

「全く静かに帰りたいかったのに・・・」

「姉上一体何があったのじゃ？」

「黙ってなさい！秀吉」

「はい・・・」

秀吉は正座をした

そして・・・

新一も正座をしていた

「何であんたも正座をしているの？」

「は！体が勝手に・・・」

「全くあんたは・・・首に錠前なんか・・・付けて ん？錠前？」

「まさか・・・この鍵って？」

「あ・・・その鍵俺のだ」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「姉上！（秀吉！）」

「「新一イイイイイイ」」

「は、はい！！」

「アアアア」

これは・・・聞かなくても分かるだろう

「あんたは・・・なんで連絡をしないのよ」

「だって・・・電話番号知らないし・・・優子さん何で笑っているのですか？」

「嘘はもう少し上手くなりなさいね」

「今は・・・新一が悪いの」

今は帰り道・・・

「秀吉と優子はどのクラスになるんだろうな」

「姉上はやっぱAクラスかのう・・・」

「秀吉・・・あんたはFクラスじゃない事を祈るわ」

「で・・・新一はこのクラスに入るのよ？」

「ん？・・・俺はFクラスに入るように頼んだ 学園長に」

「なんで？新一ならAクラスにあっさり入れるのに・・・」

「新一なら簡単には入れるようなもののにのう・・・何故じゃ？」

「俺は教師ならともかく・・・生徒として入って来たんだ当たり前だろう。だから・・・振り分け試験は圧倒的に点差が付くからあと・・・試召戦争に参加も禁止されている」

「2年生からでできる新しいシステムの事ね」

「考えてみる・・・召喚戦争に出られない奴がAクラスにいたらおかしいだろう・・・」

「だから・・・Fクラスを使うわけだ」

「クラスの設備の変更時俺も必ず当てはまるわけだ・・・」

「戦争時は・・・俺は西村先生と同じ扱いとなるわけだ・・・あくまでも俺は戦死者を補習室送りにするだけだ・・・補習をするのは西村先生だからな」

「戦死したら・・・大変じゃろうな」

「俺も召喚獣はあるのだが・・・条件を満たさないとできない」

「まず一つ俺の鍵前がはずしてある」

「次に西村先生が学園長の承認が無ければ出来ない」

「かなり不便じゃな・・・」

「仕方が無いよそれが・・・この学園に入るための条件だから」

「で・・・アメリカで何をしていたの？（じゃ？）」

「え？勉強ぐらいかな・・・」

「彼女はできてないよね・・・」

「できる訳ないでしょ・・・友達もできなかったのに・・・」

「何か色々ごめんなさい（なのじゃ）」

「大丈夫・・・気にしていないから・・・はあ・・・」

「姉上よ・・・新一がかなり落ち込んでおるぞ」

「わかってるわよ」

「でも・・・優子がいれば別に寂しくない」

「そんなこと言われたら・・・恥ずかしいじゃない（ボソ）」

「何か言った？」

「何でもないわよ」

「でも・・・優子とは友達より彼女の方が良いけど・・・」

「なっ・・・」

「優子・・・顔が赤いぞ？」

「あんたのせいだろうがあ！」

「秀吉と優子また明日」

「また、明日」

「さて、実家に帰るか・・・あつその前に買い出し行かなきゃ」

クラスと天才と召喚獣

「おはようございます 西村先生」

「おはよう神山」

「先生も朝から大変ですね」

「ああ、そうだなどうせ・・・Fクラスの奴らはバカだからな 本当は俺が担任をやりたいところなのだが・・・」

「それは良い事ですね！私もそれが良いです なんせ・・・西村先生に鍛えてもらえたら自分もうれしいです」

「そういう事を言うてくれるのはお前ぐらいだからな」

「それでわ時間なんで お仕事頑張ってください」

さつき話ををしていたのは西村宗一先生周りからは「鉄人」と噂されている

趣味が（あだ名の元でもある）トライアスロンという超肉体派教師で、その鍛え上げられた筋肉は最低成績ですら普通の人間の数倍の怪力を持つ召喚獣と互角に渡り合い、明久の頭を片手で鷲づかみにして振り回した拳句頭にヒビを入れるほどの力を持つ。レスリングの心得もある。

Fクラスの生徒が補習から脱走しようとするのを気配で感じ取るなど、人間離れたスペックを有している。生活指導室を根城にしており、「規律を乱すものには鉄拳制裁」という教育方針から学園の

ほぼ全生徒に恐れられている。試召戦争の時は補習室の管理をしており、戦死者を「鬼の補習」によって「趣味が勉強。尊敬するのは二宮金次郎」という理想的な生徒に教育するという（この補習は拷問であると恐れられている）。

「そうだ！西村先生」

「何だ？神山」

「この手紙を学園長に渡してくれませんか？」

「内容は？」

「大した事ではありません。ただ・・・自分も試召戦争に参加したので参加時の点数の固定を申請したいと思います」

「その点数とは？」

「自分の現在の点数が大体2500なので・・・その5分の1で参加させて戴きたいと 自分も参加したいですから・・・」

「一応・・・出しておこう 本当は神山をAクラスに入れてやりたいたんだが・・・大学を卒業していてそれで・・・Aクラスに入れたら試召戦争の意味が無くなるからと・・・学園長の考えだから仕方が無いな」

「いえいえ・・・自分がFクラスに入るのは仕方が無いです 大学を卒業して自分の願いでこの学校に入りたいと願ったのですから・・・自分もそのバカの一人ですから」

「ほら、さつさと教室に行け・・・」

「はい」

そして新一は二年生の廊下に向かった

「この感じが懐かしいな、小学校以来だ」

「さて・・・教室に行くか」

「俺はFクラスの前にいるこれから１年間一緒になるのだから挨拶は肝心だな」

「おはようございます」

「早く座りやがれこのウジ虫野郎」

「・・・殺す」

「いや・・・すまなかった」

「問答無用」

そして・・・俺はウジ虫野郎と言った奴をボコボコにした

「すみませんでした」

「分かればよし、でも何で俺の事をウジ虫と読んだか言ってくれないか？」

「いや・・・それはだな」

「みんなおはよ」

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

ふいにはいごからはきのないこえがきこえてきた。そこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、以下にも冴えない風体のおじさんがいた。

「それと席についてもらえますか？HRを始めますので、
どうやらこのクラスの担任みたいだ。」

「はい、わかりました」

適当に見付けた席に座った。

「えー、皆さんおはようございます。二年F組担任の福原慎です。
よろしく願います」

「なんで先生は名前を黒板に書かないんだろう？」

「チョークがないんじゃないか？てか、どうやって授業受けるんだ？」

「あとでチョークと黒板消しを申請ときましよう」

「さて、皆さん卓袱台と座布団はありますか？不備があれば申し出て下さい」

先生がそう言うときクラスメイトの一人が

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんどは言っていないです！」

「あー、我慢してください」

「先生、卓袱台の足が折れてます」

「木工ボンドが支給されていますので、あとで自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて隙間風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましよう」

「あと皆さん、必要なものがあれば極力自分で調達してください」
これは、また酷いな… Aクラスとはえらい違いだ。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

こうして、自己紹介が始まった。

以下省略

そこから・・・数日

Dクラスに勝利と荷物を破壊されるがBクラスに勝利・・・

そして・・・

放送であゝFクラスの神山新一君至急空き教室に来てください

「来たか・・・神山」

「はい・・・西村先生」

「これからお前には試召戦争の参加が下りた」

「と言う事は・・・」

「お前の手紙が受理された」

「ありがとうございます」

「さっそくなのだが神山の召還獣の運用試験をやってもらっ」

「はい・・・では試獣召喚『サモン』」

「手紙のとうり・・・全て500点に固定してある　さて・・・動かしてみる」

「なかなか動かしにくいな・・・」

「大体やっていれば慣れてくる・・・そしてこれを使え」

「西村先生から鍵を受けとった」

「では解いてみる」

そして鍵を鍵穴に通しリミッターを外した

「神山は白髪になるのか・・・」

「いえいえ・・・この姿の時は化物ですよ」

「召喚獣は服装もかわるんですね」

「それは知らなかったな・・・」

数時間後・・・

「もう良いだろう・・・鍵を付けて戻れ　次の試召戦争から参加できるからな」

「ありがとございました」

「新一何かいいことあったの？」

「ああ・・明久やつと自分の召還獣が来たんだ今度のAクラス戦が初陣だな」

クラスと天才と召喚獣（後書き）

手紙の内容は

director Manabu

Though it is thought that I am
an impossible asking because
Shinichi Kamiyama wants to par
ticipate in the 「tame me」 war

It wants to ask for the point
of the distribution examination
of Shinichi Kamiyama and to
ask to participate in the 「tame
me」 war by 1/5 「nishite」.

The student in the educational
institution, it is assumed th
at it helps being possible to
do.

学園長様

私、神山新一は試召戦争に参加したいがために無理なお願いだとは思いますが

神山新一の振り分け試験の点数を5分の1にして試召戦争に参加することをお願いしたいと思います

そのかわりに学園の生徒としてできる限りの手伝いをするとし

ます

主人公紹介（前書き）

東方ネタを入れてみる事にしてみました

主人公紹介

神山新一 17歳

文月学園二年Fクラス

首に錠前があるのが特徴

黒髪であるがリミッターを外すと白髪になる（例；男版 妹紅）

M I Tを四年で卒業（吉井姉とは知り合い）

小学校6年生の時アメリカに引っ越ししM I Tを卒業した後・・・

即、文月学園に転入

特技

家事全般 勉強 お菓子制作 楽器全般

趣味

ゲーム 読書 演奏

好きなもの

優子 お菓子（莓系）姉

嫌いなもの

かぐや姫関係

現代にも生きる不老不死の人間 平安の世に生まれ姉と共に蓬萊の薬を飲んだ

姉を探していたが見つかり（八雲紫にて幻想郷にいたことが分かった）

よく秋に筍を送ってくる

本当の名字は藤原 推定年齢1000歳以上

召喚獣

元は優子と同じ長い槍とバイオリンを持っているが・・・

リミッターを外すと上はYシャツの下はお札付きもんぺを履いている

腕輪も使用可能

「凱風快晴」

自身の槍を上投げて持つところに高速の蹴りを入れて飛ばし相手を大量に吹き飛ばす

番外編 新一の悪夢（前書き）

今回はとても書いてて胃が重くなっ
たお話です

番外編 新一の悪夢

午前四時・・・新一起床

「あゝ眠い でも・・・昼の弁当作らなきゃ」

現在・・・新一は昔住んでいた家にいる（名義は新一の姉になっている）

本当は・・・親戚（そんなに知り合いで無い）がいるが自分の家が
良いのだ

本人の寢床は現在自分の家の書物庫に当たる家の大図書館に当たる
まだ・・・帰って来てからそんなに経っていないので部屋がこの大
図書館以外掃除がされていない（調理場と風呂場は除く）

制服に着替えて調理場に行く

「今回は優子に食べて貰うために頑張つて作るぞ」と、気合を入
れてみるが実際他の人はあんまり新一の弁当を食べに来ない
それは・・・メンバーの大半が姫路の弁当を食べに行くのだから（
本人たちは連行されている）

「今回も皆が食べてくれるように頑張らなきゃ」と女子みたいな考
えの新一であつた

「でも・・・いきなり優子に弁当を持っていても困るだろうな・・・
・教室に着いたら秀吉に聞いてみよう」

「今回は重箱にしよう優子喜んでくれるかな？」

新一は棚から3段重箱を取り出した

「さて、そろそろ・・・作らないと今回は料理本を基に作ってみよう図書館にも確か数冊あったな」

「問題1 玉子焼きにするか出し巻きにするか？」

「問題2 何段目にご飯を用意するか」

「問題3 カロリーに気を付ける」

あと、お菓子も作ろう

昔・・・ノリで買ったので（人生で家の知識は必須だったので）家のサイズに比例してキッチンも大きい

「今回は玉子焼きにご飯はおにぎりにして3段目に詰めよう　なんか・・・小学校に時に作ったお弁当みたい」

「あつ・・・その時も俺が作ったんだった」

そう・・・実は小学校の時は姉の妹紅はある場所で勝負をしていたそれを最近知り合った・・・八雲紫と名乗る大妖怪が言っていた

「姉上元気かな　まあ筍送ってくるみたいだから元気だろうな」

先に言っておくが現在は・・・白髪モードだ（優子と秀吉は知らない）

「あと・・・お菓子は何を作ろう？　食後にケーキは重いからクッ

キーにしよう でも・・・Aクラスの皆さんの分も作っておこう
Fクラスの野郎どもには作ろうか悩むところだ

さて・・・作りますか

数時間後・・・

お弁当は完成1段2段はおかずで3段目がおにぎりだカロリーは大
丈夫！いちよう・・・これでも栄養士の資格は取れるように研究さ
れている

バイクの免許も取ってあるし・・・

「今度の休みはバイクの手入れもするか数年帰っていないと色々掃
除が大変だな」

さてクッキーを作るか・・・

「大体・・・必要な分は昨日用意してある 昨日の帰りは荷物がす
ごかったが」

数時間後・・・

クッキー完成 今回はソルトクッキーを作りました

そして時計を見る

「そろそろ・・・時間だな」

新一は重箱を風呂敷に詰め　クッキーを袋詰めして学校に行く

そして自分の首に錠前を付ける

そして・・・家の戸締りをしてから・・・学校に行く

学校は勉強をするところなのでちゃんと授業には参加する

そして・・・学校に着くと何時もどおり・・・西村先生が立っている

「おはようございます」

「おはよう神山・・・Fクラスはどうだ？」

「面白いですよ・・・朝焼いたクッキーをどうぞ」

「後でいただく・・・ありがとうございます」

「後で職員室にも持っていきますので」

「他の先生にも渡すのか？」

「はい、先生方にも今後ともお世話になりますし」

「そうか・・・でも、どれだけ作っただ？」

「大体・・・400～500位ですかね」

「自分のクラスとAクラスにも持っていこうかと・・・」

「来年はAクラスに行くかもしれないからな。まあ……神山の成績なら問題無いだろう」

「では……先を急ぎますので」

新一は教室に向かった

「おはよう」

「おはよう新一」

「おう、明久元気か？」

「今日も元気さ」

「そんなお前に良い物をやろう」

「え？良いもの？なにになに？」

「クッキーをやろう」

「やったー」

「おはよう秀吉 ムッツリーニ 雄二 姫路さん 島田さん」

「おう」

「おはようじゃ」

「おはよう」

「おはようございます」

「……おはよう」

「みんなもクッキーをどうぞ」

「おい！野郎ども！クッキーをやるから欲しい奴は来い」

「全員来るの早くな？」

「「「「「「俺たちだって欲しいし」「」「」「」」

「ほら……持ってけ」

「さて、職員室に行くか……」

新一は職員室にクッキーの袋を持って向かった

「失礼します！クッキーを持ってきました 皆さんの分もあるので
どうぞ」

「「「「「気が利いてるな ありがとう」「」「」」

「いいえ、朝時間があつたので作っただけですから…… それで
は失礼します」

「お昼にAクラスに行ってみるか……」

新一はFクラスの教室に戻った

「なあ・・・秀吉、優子は昼はAクラスの教室にいるかな？」

「姉上は教室にいると思うが・・・そんな事を聞かなくても良いじゃろ」

「いやあゝ優子とお弁当を食べようと思うから・・・後、Aクラスにクッキーでも持っていこうかと」

「お主も大変じゃのう・・・なかなかこんな時にしか勇気が出なくて」

「仕方がないだろ・・・勇気が出ないんだから　そういえば・・・昨日姫路達とお弁当会はどうだった？　帰ってきたら皆死にそうな顔をしていたけど」

「そこは気にしないで良いのじゃ」

「でも・・・Dクラスに勝ったんだもん俺も早く試召戦争やりたいよ」

「でも・・・お主参加できないんじゃない？」

「大丈夫こんな時の為に手は打ってある　次のBクラス戦が終わった後に参加できるかもな・・・」

お昼

現在・・・Aクラスの前にいる 自分のお弁当とクッキーを持って
Aクラスの扉を開けようとした時 前から黒髪ロングの女子生徒に
声を掛けられた

「誰？」

「Aクラス代表の霧島さんで会ってる？」

「そうだけど・・・何で私の名前を？」

「転入生だから各クラスの代表の名前は覚えるようにと言われたか
ら」

「そう・・・誰かに用？」

「はい・・・木下さんいる？」

「ちょっと待ってて 優子ちょっと来て」

「代表何か用？ って新一じゃない・・・」

「お昼一緒にどうかたと・・・」

「まあ・・・良いわ入りなさい そんな所にいたら通行の邪魔だし」

「そうだな・・・」

「優子どうしたのかな？」

黄緑の女子生徒が疑問に思っていた

「で・・・あなたのお弁当は持ってきている」

「ちゃんと此処にあります」

「何で重箱？」

「これなら・・・多人数でも困らないかな」って

「まあ・・・良いわ来なさい」

「ねえ・・・優子この子誰？」

「幼馴染よ 名前は・・・」

「神山新一だ よろしく」

「僕の名前は工藤愛子よろしく で・・・僕は君の周りのお菓子の匂いが気になるのだけど」

「いちようAクラス全員分は用意してあると・・・思う 先に優子の分は渡しておく」

俺は優子にクッキーを渡した

「ありがとう」

「お弁当にしよう」

「僕は新一君の弁当の中身が気になるな・・・」

新一は風呂敷を解き重箱を開けた

「気合入っているね　なんか・・・運動会のお弁当みたいにこれ手作り？」

「うん・・・自作　優子に食べて貰いたいし」

「まあ・・・ありがとう　では・・・戴きます」

優子が玉子焼きを食べた

「おいしい」

新一は胸を撫で下ろした

「ほっとした・・・優子においしいって言われて」

お弁当を食べた後Aクラス皆は紅茶と一緒に自分が作ったクッキーを食べていた

「おいしい」と女子から聞こえた

「うまい」と男子からも聞こえた

「優子からも聞けて良かったよ作ったかいがある」

「ねえ・・・神山君は料理だけじゃなくお菓子も得意なのかな？」

「まあ・・・お菓子は大体作れるよ ケーキとかタルトとかシュークリームとかも・・・」

「シュークリームも作れるの？僕シュークリーム大好きなんだよ」

「そうなのか・・・優子が良いなら作ってこよう」

「私も良いけど・・・新一の作るお菓子また食べてみたいし」

「でも・・・少しかかるよ工房の掃除もしたいし流石に4年は長過ぎた」

「最近まで・・・アメリカにいたもんね」

「ああ・・・たしかバイトで小さなケーキ屋に入ってお菓子を作ってたら何故か有名になった」

「そのお店の名前は？」

「確か・・・グングニルってお店だったかな？ いきなりパティシエ扱いになって何でか？結婚式場のウェディングケーキまで作らされたっけような・・・」

「「「「「えーーーーー」」」」」

「！ー！どうした？」

「グングニルってあの・・・僅か4年で有名になった」

「なぜか・・・日本に帰ろうとしたら店長に泣かれた・・・レシピは置いといたけどときどき大丈夫かなと思う時がある」

「グングニルのケーキが食べれる」

「こんなチャンスは無い」

俺は身の危険を感じた

「優子・・・俺そろそろ教室に戻るね」

ガシッ

どうやら・・・優子に捕まったようだ

「ねえ・・・新一私お菓子が食べたいなあ」

「まあ・・・優子が望むなら何でも作るけど・・・」

「それに何で・・・皆さんは僕を睨んでいるんでしょうか」

「それはね・・・新一皆はねお菓子を作ってほしいな〜とお願いしているよ」

「流石に俺はそんなには作れない バイオリンの練習もあるし」

「今度はシュークリームを作ってくるよ・・・」

新一が窓から落ちた

「……「逃がすな」……」

「このまま授業まで隠れるか Aクラスやばいよ」

そのあと新一はAクラスの搜索の末優子によって確保された

そのあと……

「がああああ腕が痛いイイイイイイイイイイイイイイイイ」

優子に関節を決まれた後 明日シュークリームを持ってくる事を
約束（脅迫）された

そのあと……帰ってから工房の掃除を開始した

「あゝ疲れた」

「なに、疲れた顔してるのよ」

「はっ！！誰だ」

「あんたが工房に来てても良いって言ったんでしょぅが」

「でも、一体どうやって」

「あんたがくれた鍵を使ったら入れたわよ」

優子は首にかけてある鍵を新一に見せた

「ああ・・・そうだったな　でも・・・よくあの鍵が家のマスターキーだと解かったな」

「適当に使ったら開いたわ」

「はは・・・適当にね」

不法侵入とか突っ込みが入れなかった

「今からお菓子作るけど見ていくか？」

「どうせ・・・あたしの分は先に作っておいたんでしょ」

「詳しいな・・・一度も家に入れた事が無いのに」

「あなたの思考パターンは考えてある」

「その自信は何処からだよ・・・」

「優子今から作るから鍵を貸して」

「何で鍵がいるのよ」

「仕方が無いだろ、そうしないと上手くいかないんだから」

「まあ良いわ・・・代わりにお菓子貰っても良い？」

優子が新一に鍵を渡した

「代わりに冷蔵庫にあるから好きなの食っても良いぞ　紅茶もあるから好きな奴を飲むと良い」

「それじゃあ・・・取ってくるね」

優子が冷蔵庫に向かった

「俺は作業を始めますか　気が乗らないけど・・・一個ぐらいは余分に作るか」

新一が鍵を通し錠前を外した

「髪の色が変わるのはどうしたものか・・・昔は良かったけど今は世間の目がなあ・・・」

「そんな事は後、後お菓子作りを始めるか」

そして・・・優子が良い顔で戻ってきた

「はあく美味しかった　そこらへんのケーキ屋のケーキより美味しかったわね」

「新一は頑張っているかな」

優子はスキップしながら工房に向かった

「新一シュークリームは・・・？」

「おう、優子どうした？」

「あんだ・・・その髪」

「いや、何でもない・・・そうだ晩御飯食っていくか？ どうせ晩飯一人だし」

「いや・・・今日は帰るわ 今さっきショッキングな出来事に遭遇しているから」

「なら・・・もうすぐ焼けるシュークリーム食べるか？」

「それは・・・食べるけど あんたの髪が白色の方が謎だわ」

「それは・・・また今度説明するよ」

最悪な事に優子に秘密がばれた事だ・・・

次の日・・・

昨日のとうり・・・昼食時 新一は大量のシュークリームを持ってAクラスにいる

それは・・・優子含む工藤さん、霧島さん他にシュークリームとクラボックスを持ってきているからだ

「帰ろう・・・」

ガシッ

どうやら・・・優子に肩を掴まれたようだ

「…………どこに行こうとしているのかな?」「…………」

「教室に戻ろうかと……自習をしたいし」

「ねえ……みんなどうやら新一が帰ろうとしているんだけどどうしようかな?」

「…………え?何でかな?」「…………」

「優子放してくれ……俺は帰るんだ教室に……」

「今日も私とお弁当を食べたいから来たんでしょ」

「はい……」

「なら、入ればいいじゃない」

「いや、優子の邪魔をするのは失礼だし……それに」

「それに?何よ?」

「優子にあげるお菓子が……」

「…………お菓子が?」「…………」

「パフェになった」

新一はク ラボックスから特製パフェを出した

「どうぞ……」

「え……？あたしこんなの一人で食べられない……」

「回りの女子を集めて食べたら？」

「そ……そうねみんなも食べる？」

「」「」「食べる」「」

男子より女子の方がよく聞こえた

こつした経緯で新一はAクラスのお菓子係に任命されたが……（本人はかたくなに断っている）処が優子を餌にしたら思う様に釣れた女子は歡喜に満ち溢れていた

番外編 新一の悪夢（後書き）

新一は優子の為にお菓子を作り続けるのか？

優子はお菓子の食べ過ぎで大丈夫なのか・・・

新一は何時優子に秘密を話すのか

お互いの気持ちは近くなっているのか？

次回はAクラス戦をかけるのかな？（by作者）

俺と初めての試召戦争と告白（前書き）

かなり適当です

PV合計6000アクセス読んで下さった方ありがとうございます

感想とか色々お願いします

主人公の苦手なものが考えていないので皆さんに募集します

俺と初めての試召戦争と告白

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能と言われていたのにも関わらずここまで来れたのは、ほかでもない皆の協力があったることだ。感謝している」

珍しく雄二が素直に礼を言っている

「雄二、らしくないな」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」
確かにここまで来れたのは俺たちだけでなく全員の協力があったことだ

「ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ！」

『おおーっ！』 『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

下がる予感がしないFクラスの士気。さすがだな……

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着付けたいと考えている」

『どういうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

机をたたき、皆を静まらせる

「やるのは当然、俺と翔子だ」

雄二と翔子って知り合いなのか……？

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ！？」

なんかカッターが飛んできたけど無視。

「次は耳だ」

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかった。今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない」

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ!』

にしても、相変わらずテンション高いなこのクラス……

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？なんの教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負でなく純粋な点数勝負とする」

「でも、同点だったら延長戦だよ？そうしたら問題のレベル上がるだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かにそうじゃな」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでもそこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「ならどうするんだ？翔子の弱点なんてほとんどないだろう」

「ああ、そうだな」

「雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろタネ明かししても良いじゃろう」

秀吉がしびれを切らしてはなった言葉にクラスの皆も同意している

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

長すぎだ・・・

「俺がこのやり方を選った理由は一つ。ある問題が出ればあいつは確実に間違えると知っているからだ」

小学生レベルで間違う問題・・・・・・・・？

「その問題は 『大化の改新』」

645年、中大兄皇子が中臣鎌足とともに蘇我氏を倒したってやつか

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルで出てくるかな」

「いや、そんな堀下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「何年に起きた、とかか？」

「ビンゴだ新一。その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

ホントにこんな問題であいつが間違えるのか・・・・？

明久でも間違えない・・・・・・・・と思ったら明久が口パクで

『鳴くよウグイス、大化の改新』と言っていた・・・・

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久で

すら間違えない」

「いや、こいつ794年と思っていたぞ」

「新一！なんてことを言うんだ！！」

明久が何か言ってきたがスルー

「……さすがは明久だ。だが、翔子も間違える。これは確かだ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばだ」

「そついや、雄二って翔子と幼馴染？」

「ああ。そうだ。でもなんでお前が　「総員、狙え！！」 なっ何故明久の号令で皆が急に上履きを構える！！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺がいったい何をしたと！？」

Fクラスの男子生徒はこういう時こそ力を発揮し、団結する

「遺言はそれだけか？………待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

いつの間にか明久が隊長になってるし

「あの、明久君」

「ん？なに、瑞希」

「明久君は私より霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だけど……」

「あと美波、どうして僕たちのほうに向かって教卓なんてものを投げようとしてるの！！？」

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

唯一ともいえる常識人、秀吉が場を取り持つ

「秀吉……邪魔をするな」

「冷静になって考えてみるがよい。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二以外に興味があるとは思えんじやろうが」

「むしろ興味があるとすれば……」

クラスの皆の視線が姫路に向く……。昔、同性愛者という噂が霧島さんにはあつたな…今もだが

だが、本来視線を向けるべき相手は雄二である

「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

「皆、いつものように嫉妬に怒り狂うのはわかるが、噂が噂だ。ここはFクラスの数少ない女子生徒を守るために今回は明久にゆだね

てみないか？」

『・・・・・・・・・・今回だけだぞ』

そう言つて引きさがつてくれた。案外扱いやすいな、このクラス

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さいころに間違えて嘘を教え
ていたんだ」

幼馴染というワードにまた動きかけるFクラスの連中

「アイツは一度覚えたことを忘れない。だから今、学年トップの座
にいる」

アイツも完全記憶能力か・・・・・・・・？

「それを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は
」

『システムデスクだ！』

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申
し込む」

今回は雄二をはじめとした主要メンバーでAクラスに宣戦布告しに
来た

「うーん、何が狙いの？」

それでもって現在交渉中なのは優子。悩む姿も可愛い

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「それにたかがゲームだぞ。命もかわらないんだからいいだろ」

「……………いくら新一が言っても簡単には決められないわね」

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせれるのはありがたいけど、わざわざリスクを冒す必要もないかな」

「懸命だな」

さあ、ここからが本番だ

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

雄二は悪役顔して訊く

「時間はとられたけど、それだけだったわよ？何の問題もないし」

秀吉の挑発にまんまと乗ったCクラスは昨日Aクラスに攻め込み、半日で決着がついた

「Bクラスとやりあう気はないか？」

「Bクラスって……………。昨日来ていたあの……………？」

「ああ、アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされてないようだがさて、どうなる事やら」

「でも、BクラスはFクラスと試召戦争下から、三か月間準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずよね？」

試召戦争の決まりの一つ、準備期間。

戦争に敗北したクラスは三カ月の間、宣戦布告はできない。

自分から出来ないだけで、申し込まれたら戦争しなければならないこれは負けたクラスがすぐ再選を申し込み、戦争が泥沼化しないようにするための取り決めだ

「知っているだろ？実情はどうであれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規約には何の問題もない。…… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「……………それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだ」

雄二が悪役になったな。そういう仮面もあると便利だと思うが

「うーん。わかったよ。何をたくらんでるか知らないけど、代表が負けるわけないもの」

あっさり返事をしてきたな……………まあアレのクラスよりはまし

だろ

「だって、あんなかつこうした代表がいるクラスと戦争なんていやだもん……」

「なあ明久、俺Bクラス戦出てないから教えてくれないか？」

俺は明久に事実を聞いたら吐きそうになった……

「でも、こっちからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、お互いに5人ずつ選んで一騎打ち5回で3回勝ったほうの勝ちって言うのなら受けていいよ。あと、個人的なことだけど、私と神山の試合も入れてね」

「なるほど。姫路を警戒してるんだな」

「そうか。それなら条件を呑んでもいい」

「……雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？代表。いいの？」

「……うん」

「……その代わり。条件がある」

「条件？」

「……うん」

うなずいて、たまたま雄二の後ろにいた姫路をじつくりと観察した

「……………負けたほうはなんでもひとつ言うことを聞く」

翔子がそう言った瞬間、明久は姫路の前に立つ

「……………（カチャカチャ）」

康太、それはまだ必要ない

「面白そうだな……………優子、俺たちも負けたほうが一つ言うことを聞くってことでどうだ？」

「べ、別にいいわよ？」

何故疑問形……………？

「じゃ、こうしよう？勝負内容は5つのうち3つはそっちが、残り二つはこちらが決めるってことにしてくれない？」

「交渉成立だな」

「そうだね。」

「……………勝負はいつ？」

「十時からでもいいか？」

「……………わかった」

「よし、いったん教室に戻るぞ」

「ほかの皆に報告しないといけないからな」

そうして、俺たちは教室に帰っていった

「では、両名共準備はいいですか？」

場所は変わりAクラス。試召戦争の立ち会いはAクラス担任の高橋先生

「ああ」「……………問題ない」

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

いきなり優子か、なら俺しかないじゃないか

「いきなりとはせつかちだな」

「いいじゃない。ところで秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんってしってる？」

「はて、誰じゃ？」

Cクラス……………小山……………ハッ

「じゃーいいや。その代わりちょっとこっち来てくれる?」

「うん? ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上?」

「秀吉……生きて帰ってこい」

心からのご冥福を祈る……

『姉上、何の用 どうしてワシの腕をつかむ?』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら? どうしてアタシがCクラスの人たちを豚呼ばわりしていることになってるのかなあ?』

『はっはっはっ。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して
あ、姉上っ! ちがつ、その関節はそっちには曲がらなっ……
……』

……優子が帰ってきた、そりゃもうすがすがしい笑顔で

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。さあ始めましょ」

「そうだな、ホントにお前と戦う日が来るとはな……」

「そうね。確かになかったわね」

「ホントはAクラスを落とすのに気が引けただけな……お前と戦えるってことが何より楽しみだっ」

「ふふふ……さあ勝てるかな?」

「教科はどうしますか？」

「数学で」

「ちょっと、アタシの得意教科じゃない!!」

「俺はどの教科も変わらないからこれでいいだろ」

「では召喚を開始してください」

「「^{サモン}試獣召喚」」

優子と新一の召喚獣は西洋風の鎧と槍だった。

『Fクラス 神山新一 数学500 VS Aクラス 木下優子
数学 449』

「始めから飛ばしていく!!」

そんな攻防がしばらくの間続き、2人とも徐々に点数を減らしていた

『Fクラス 神山新一 数学10 VS Aクラス 木下優子 数
学 9』

「初めてだから使いにくいな……本気も出せないのに」

「アンタ……初めてでこの動きは凄すぎるわよ」

「行くぞ」

「来なさい」

「うおおおおおおおおおおおおおお」

グサ

優子の槍が俺の召喚獣の胸に刺さり消失しその瞬間新一が気絶した

「試召戦争はどうなってる？」

「さっき3戦目が終わってこれから4戦目よ」

「そうか・・・」

「雄二、負けちゃってすまねえな」

「ん、新一か。気にしないでいいぞ。俺たちもいいものを見せてもらったしな。それと、もう大丈夫なのか？」

「ああ。迷惑かけたな」

「その言葉はあっちの彼女に言ってやれ」

そう言って優子のほうを指さす

「そうだな。で、今どうなってるんだ？」

「ああ、お前のあと、明久が普通に負けて、姫路が久保に勝って1

「2つてとこだ」

「そうか」

「では4人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

高橋先生のコールで康太が立ち上がった

今まで教科選択権はまだ1回、ここでこれが生きてくる。

康太は総合点数のうち8割が保健だからな

「じゃあボクが行こうかな」

対するAクラスは愛子が来るようだ

「1年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

見たことないやつも多いのだろうか、自己紹介されてもピンとこないようだ

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね」

康太の実力を知らないのか、愛子は余裕っぽいな

「でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？……キミと違って、実技で、ね」

問題発言により騒ぎ立つFクラス陣。……実技をサッカー、野球とか運動のほうで誰一人捉えないつてのも不思議だな

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかつたらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「そろそろ召喚してください」

「はい試獣^{サモン}召喚つと」

「……試獣^{サモン}召喚」

康太の召喚獣は小太刀に忍者装束、愛子のほうはセーラー服に斧を装備していた

「実践派と理論は、どっちが強いを見せてあげるよ」

言い終わると同時に愛子の召喚獣は腕輪を光らせながら動いた。

斧に雷撃をまわせている

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」

今にも斧が当たると思った時……

「……加速」

康太の召喚獣の腕輪が輝き、超高速で動き出す。

しっかり姿が見えてるのは俺と優子くらいじゃないだろうか？

「……………え？」

愛子の戸惑った顔

「……………加速、終了」

ぼそりと康太がつぶやく

そして、愛子の召喚獣から血が噴き出した

『Fクラス 土屋康太 保健体育 572 VS Aクラス工藤愛子 保健体育 446』

さすがだな……………500点越えとは

「これで2対2です。最後の一人、どうぞ」

「……………はい」

Aクラスからはもちろん翔子

「俺の出番だな」

Fクラスは雄二。こいつしかない

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

雄二の発言でAクラスが揺れる

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

高橋先生が教室を出ていく。

俺は自然と雄二のそこへ向かう

「雄二、後は任せたよ」

明久が雄二の手を握る

「ああ。任せられた」

「……………（ビツ）」

康太が歩み寄りピースを雄二に向ける

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「・・・・・・・・・・（フツ）」

康太は口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻った。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ。明久のことか。気にするな。これからは幸せにな」

「はいっ」

「雄二、勝ってこいよ」

俺は一言だけ伝える

「ああ。お前にもいろいろ助けられた。後はまかせとけって」

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

戻ってきた高橋先生が2人に声をかける

「・・・・・・・・はい」

「じゃ、行ってくるか」

これですべてが決まる・・・

「皆さんはここでモニターを見ていてください」

『では、問題を配ります。制限時間は50分。満点は100点です』

『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『・・・はい』

『わかってるさ』

『では、始めてください』

これで、あの問題が出ていなかったら俺たちの負けだ

《次の()に正しい年号を記入しなさい》

・・・

・・・

.....

.....

() 年大化の改新

「あ・・・!」

「出たな・・・」

「うん、これで僕たちの卓袱台が」

『システムデスクに!』

「最下層に位置した僕たちの歴史的勝利だ!」

『うおおおお!』

《日本史限定テスト 100点満点》

《Aクラス霧島翔子97点 VS Fクラス坂本雄二 53点》

俺たちの卓袱台が………ミカン箱になった

「3対2でAクラスの勝利です」

高橋先生の宣言が容赦なく俺たちに突き刺さる

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる!歯をくいしばれ!」

「吉井君、落ち着いてください!坂本君にはこれまでがんばってくれたんですから私の(失敗)料理をあげるんですっ!」

姫路、お前が落ち着け

「だいたい53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとか考えられるのにこの点数だと」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしようが！」

「この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

「…………でも、危なかった。雄二が初戦小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

図星かい

「……………ところで約束」

「あ、アタシのもね」

戦いに熱中しすぎて忘れたな…………でも大体分かるんだけどな

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

康太、こういうときは行動力あるよな

「わかつている。何でも言え」

こうなると雄二は潔いな

「・・・・・・・・それじゃ

」

明久が姫路の前に出る

翔子は小さく息を吸って

「・・・・・・・・雄二、私と付き合って」

おおー言ったか。やっぱりそう来たか

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「・・・・・・・・私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話はなんでもことわっただろ？ほかの男と付き合う気はないのか？」

「・・・・・・・・私には雄二しかない。ほかの人なんて、興味ない」

あの噂は翔子が雄二が好きだから雄二の周り異性が気になったからか

「拒否権は？」

「・・・・・・・・ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに」

翔子は雄二の首根っこをつかみ、教室を出て行った

・
・
・
・
今度は俺の番か

「で、優子はどうするんだ？」

「えーっと……その……」

こういつときになるほど優子って引つ込むんだよなあ――

「じゃあ、お互い同時に言ってみるか……」

「うん」

「せーの」

こいつ言っていない言葉なんてあと一つしかない……

だから精一杯この言葉を……

「結婚しよう（しましよう）優子（新一）」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12

やばい、
すごく恥ずかしい……

「といっても今すぐは無理だからとりあえず婚約で止めとくか」

「そうね」

「さて、Fクラスの皆、お遊びの時間はここまでだ」

ふと、扉のほうから鉄人こと西村先生の声が・・・

「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補修についての説明をしようと思ってるな」

・・・まさかな

「おめでとうお前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一念、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ!!?』

クラスの男子から叫び声が上がる。なんせ、相手は鉄人だものな

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな。いくら『学力がすべてでない』と言っても人生を渡っていく上で強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって。ないがしろにしていいものじゃない」

正論言われてるから誰も言い返せない

「吉井。お前と坂本はとくに念入りに監視してやる。なにせ、開校以来の《観察処分者》とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！何としても監視の目をかいくぐって今までより楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「…………お前には悔いを改めるという発想はないのか？」

あつたら明久じゃなくなると俺は思う

「とりあえず明日から授業とは別に補修の時間を2時間設けてやる」
う

…………明日からか…………なら今日は何もないな

「今日は私と映画を見に行かないか？俺が奢るから来るか？」

「行くよ新一 ポップコーンとか買ってもらっても良い？」

「それは良いが…………姫路と島田も来るか？」

「はい。行きます」

「うちも行くわよ」

「なら、ご一緒させてもらいましょ」

「優子との初めての作業だ。明久も準備はいいか？」

「うん」

俺たちの後ろにはFクラスの連中が…………

『もう我慢できねええええ』

と叫びだした。俺は優子をお姫様だっこして窓から逃げだす

「新一、恥ずかしいわよ／＼／／」

『神山も坂本も彼女作りやがって・・・・・・・・』

『クロス！クロス！クロス！』

『諸君、男とはなんだ？』

『愛を捨て、哀に生きるもの！！』

『よろしい、ならばあの異端者を追えええええ』

『うおおおおお！！』

俺の逃走劇が始まった。

俺と初めての試召戦争と告白（後書き）

現在・・・もう一人オリキャラを考えています
久保タイプの男子を考えています

映画館って最近行ってないな・・・（前書き）

今回、自分は一体何がしたいんだろう？by作者

映画館って最近行ってないな・・・

試召戦争を終えた僕は、鉄人の陰謀（？）によって美波と姫路さんの3人で映画館に来ている。

僕の意見は何も通らず、気付けば週末にも3人で映画を観に行くことに……

どうしてこうなった！？

チラッと後ろを見てみると、美波と姫路さんは楽しそうに話している。

まあ、あの楽しそうな2人の姿を見る為の投資と思えば安い……何っ！？

『一般1800円、大学・高校生1500円、小・中学生1000円、幼児（3歳〜）900円、大金持ち75890円、酔っぱらいお断り、団地妻OK、現地妻OK、イチヤつくのは程々に……』

映画館の受付前に掲げられているボードを見て驚愕する。

さらに視線を横の売店に向けると

『コーラMサイズ300円、ポップコーンSサイズ400円……』

絶望した！映画館の物価の高さに絶望した！！

学割があるとはいえ、チケット1枚1000円、飲み屋と食べ物で700円の計1700円、3人分だと……

映画館、なんて恐ろしい場所なんだ！僕が行くなら新一が居ないと絶対無理だ

「よ、吉井君」

「な、何？姫路さ」

「これ、見ませんか！」

「へえ、いいんじゃない。これにしようよ、アキ」

姫路さんが指差したのは『世界の中心で僕の初恋2』という作品だ。

所謂、ラブストーリー物だ。

「そ、そう……じゃあ、僕は何でも良いから……」

少しでも新一が来ないと僕の野口さんが犠牲に……

「何でも良いの？（ですか）？」

「じゃあ、アニメにする？」

美波が指差したのは『劇場版：ダメな勇者と頑張る魔王』……って、観る作品が問題じゃないんだよ！

「いや、そういうことではなく」

「観念するんだな、明久」

後ろから聞き覚えのある声が……

こゝこの声は！？

「男とは……無力だ」

後ろを振り向くと、鎖に繋がれた手枷をした雄二と鎖を両手で握りしめる霧島さんがいた。

それ、なんてプレイ？

「ゆ、雄二？」

その哀れな雄二の姿に動揺する僕をよそに、2人は何を観るか話し出す。

「……雄二、どれが観たい？」

「早く自由になりたい」

「……じゃあ、『地獄の黙示録：完全版』」

「おい待て！それ3時間23分もあるぞ！？」

「……2回観る」

「1日の授業より長いじゃねえか！？」

「……授業の間、雄二に会えない分の……埋・め・合・わ・せ（ポツ）」

「やっぱ帰る」

雄二は手枷をしたまま、鎖を引き摺りながら帰ろうとするが

「……………今日は帰さない」

霧島さんがスタンガン（どこから取り出したんだ！？）を手に雄二に襲いかかる。

バチバチバチバチ……

「な、なんだ翔子！？それ、な、あべし、や、ちょ、や、ば……………」

避ける間もなく、スタンガンをくらって黒コゲになり、気を失う雄二。

そんな雄二を霧島さんは受付まで引き摺って行き

「……………学生2枚、2回分」

「はい学生1枚、気を失った学生1枚、無駄に2回分ですね」

チケットを購入するのであった。

受付のお姉さんはそれでいいの!?

手枷にスタンガンだよ!

いくら犠牲者が雄二だからとしても、そこまで営業スマイルを貫けるものなの!?

「仲の良いカップルですね」

「憧れるよねえ」

その様子を見た美波と姫路さんは、目をキラキラさせながら羨ましそうに2人を見送る。

……皆、何か違うと思うよ。

それにしても、霧島さんってあんなにも過激だったんだね。

「アグレッシブだな霧島さんは」

ん？今度は……新一と木下さんか。

2人は仲良さそうに立ち並んでいて、手を繋いでいる。

……いや、雄二達が普通じゃないんだよね。

「私のアドバイスのおかげね。きちんと実践できてるじゃない」

「優子、霧島さんに変な事教えるなよ。」

「大丈夫よ。教えるとしても、法に引つ掛からない事を」

「その2人ダウト！高校生のする会話じゃないよ！」

君達は一切何を知ってるの！？

「神山君と木下さんは何を観るんですか？」

「ウチも気になる！何かオススメある？」

「私のことは優子って呼んで。私も2人のこと名前で」

ああ、美女が3人揃うと絵になるなあ。

3人が楽しそうに話し込む姿を眺めていると、新一が僕に近寄り小声で話しかけてきた。

「（明久、話がある）」

「（どうしたのさ新一？）」

「（一緒に『愛と約束の物語』を観るようにしてくれ）」

「（本当に！？……でも、どうして？）」

僕としては助かるけど、なんで新一はそんなことを提案してきたのだろう？

「（俺と優子もその映画を観るんだが……頼む！）」

僕に訴えかける新一の目は本気だ。

「（さらにコーラとポップコーンを奢ってくれる約束）」

「（最大サイズで奢る！これで交渉成立だ！）」

よし！カロリーGET！！

「（……でもさ新一、せっかく2人きりになれるチャンスなのにいいの？）」

試召戦争の一騎討ちで負けたせいで付き合うことになったとはいえ、もともと相思相愛だったみたいだし、僕達はいない方がいいんじゃないの？

「（構わん明久、お前は優子の恐ろしさをわかっていない……）」

試召戦争で充分に恐ろしい人だって実感したけど……

「（暗がりですきり……何をされるかわからん！）」

生徒達がいる中で、お互いに告白をする人だもんね。

あれは確かに恥ずかしいと思うよ。

まあ、新一も新一で苦労してるってことだね……

「（新一、頑張れ……）」

「（明久、お前もな……）」

こうして『愛と約束の物語』を皆で観ただけど、不覚にも泣いてしまった……

うう、恥ずかしい（／＼／＼）

映画館って最近行ってないな・・・（後書き）

今度こそオリキャラを・・・決めよう
感想お待ちしています

清涼祭って何だろう？それって美味しいのか？（前書き）

どうも・・・久しぶりです

いやゝ受験がありまして忙しかったのです
久しぶりの更新は疲れる

ロウきゅーぶのゲーム長いね・・・

清涼祭って何だろう？それって美味しいのか？

桜舞散る中に忘れた何かがあるかもしれないが、桜のシーズンが終わり新緑が芽吹き始めた今日この頃、皆様お元気ですか？

俺の通う文月学園は、年間通して最初の行事である『清涼祭』の準備を始めている。

教室の改造、調理器具の手配、展示の準備、リハーサル……

学園祭準備の為、ロングホームルームの時間はどの教室も活気が溢れている。

「吉井！こいつ！」

「勝負だ、須川君！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

我がFクラスも校庭で野球をするぐらいに、活気が溢れていた。

これぞFクラスクオリティ！

「貴様ら、学園祭の準備はどうした！サボるんじゃない！」

「『鉄人！？』」

障害物を蹴散らす勢いで西村先生が校舎内から走ってきた。

その声と姿に気付いた瞬間、脱兎の如く逃げ出すFクラスの生徒達。

勉強は三流以下でも、逃げ足は超一流だ。

「頑張れ〜」と、俺はFクラスの馬鹿共を捕まえる西村先生を外を見ながら応援していた

え？俺、いやいや面倒だし・・・

他に教室に居るのは・・・姫路・島田・木下それだけだ

「早く来いよ〜逃げて無いで」

「あつ・・・捕まった」と、外を見ながらだるそうに・・・実況していた

「そろそろ・・・来るか」俺は席に着いた

「そろそろ『清涼祭』の出し物を決めなくちゃなんのだが、議事

進行並びに実行委員長として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からどうでも良いと思ってるな坂本の奴。

やる気が全く感じられない。

「吉井君に神山君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

「直接聞いたわけじゃないからわからないけど、楽しみにしているってことはなさそうだね。興味があるのならもっと率先して動いているはずだから」

「見た感じやる気がないのは確かだと思う」

「そうなんですか……寂しいです……」

明るい姫路の表情に少し翳りがさす。

何かいつもと違うような……

「吉井君も興味がないですか？」

「う？ん、どうだろ？別にそこまでやりたいってわけでもないしなあ」

「私は……吉井君と一緒に、学園祭で思い出を作りたいです」

「ほえ？」

意味深な台詞だな……

先ほどの表情といい、今の台詞といい、姫路さんに何かあったのか？

それとも俺の思い過ごしか？

「その、吉井君は知ってますか？うちの学園祭ではとっても幸せなカップルが出来やすいって噂が……ケホケホ」

また咳き込んだか……

最近、姫路さんが咳をする姿をよく見かける。

「大丈夫、姫路さん？」

「は、はい。すみません……」

「姫路、そういう時はお礼を言ってくれた方が嬉しいんだぞ」

少し苦しかったのか、若干目が潤んでいる。

やはり体の弱い姫路には、設備ランクを更に落とされたFクラスの教室は毒でしかないな。

腐った畳も酷かったが、今は傷んだ座だから不衛生極まりない。

「吉井君、心配してくれてありがとうございます。でも大丈夫ですから……」

なるべく早い段階で衛生的な環境と体に負担をかけない設備を用意しないと、姫路さんはいつか倒れてしまう気がする。

Fクラスの試召戦争解禁までは、まだ2ヶ月ぐらいある……

何か良い手はないか？

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

「え？ウチがやるの？ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

考えるのは後にして、学園祭についての話し合いに俺も参加するか。

いつまで経っても終わりそうにないからな……

「雄二、実行委員なら美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップだ」

「雄二の言う通りだな。姫路だと少数派の意見を切り捨てたりもできないだろう。それが例えバカな意見だったとしてもだ」

普段ならそれは姫路の美点になるが、こういう時には仇となる。

この場合、気の強い島田の方が適任だ。

「それにねアキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

小さな手をぎゅっと握り締める姫路。

「学校の宣伝みたいな行事なのに。2人共物好きだなあ」

宣伝そのモノだと思うぞ。

世界的に注目されている『試験召喚システム』を世間に公開する場として、清涼祭の期間中に『試験召喚大会』が催されるんだが、正直言って客寄せパンダ的なイベントにしか見えない。

まあ、別にいいけど・・・。

「ウチは瑞希に誘われてただけだね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言ってるんじゃないんだから」

「お父さんを見返す？」

「姫路さんはお父親に何か言われたのか？」

「家で色々言われたらしいわよ。『Fクラスのことをバカにされたんです！許せません！』って怒ってるのよ」

よくある話だな。

「姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、皆のことを何もわかっていないくせに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？許せません！」

そういうことか・・・

「そういうことでFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

せっかくやる気になっているんだが、それじゃ意味がないと思うぞ。

直接言うのも気が引けるから、影で何とかするか……

それに、姫路の父親の性格を勝手に推測すると、このままじゃ姫路さん自身の転校ってこともありそうだな。

はあ、また一つ考えることが増えてしまった……

問題は山積みだ。

「話を続けていいか？」

雄二はさっさと終わらせたいんだろうな。

「どうぞ、どうぞ」

「島田が召喚大会に出るから無理と言うなら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろ？」

「副実行委員次第でやってもいいけど……」

その瞬間、島田の視線が明久に向けたのを俺は見逃さなかった。

ならばこうするまでだ！

「雄二、まずは皆に副実行委員の候補を挙げてもらって、その中から島田に2人を選んでもらい決戦投票するってのはどうだ？」

「よし、それでいい」

そう言うと、教室内から推薦の声が聞こえてくる。

「吉井が適任だと思う」

「ここはやはり吉井がやるべきじゃないか？」

「吉井にやってもらった方が……」

「吉井以外に考えられない」

さすが皆わかつているな。

「はい、そこまで！それじゃ決戦投票の人物を今から黒板に書くぞ！」

島田に小声で言い聞かせ、俺は黒板に決戦投票候補者の名前を書いた。

島田に選ばせないのだった？

細かいことを気にしているとハゲるぞ。

カリカリカリカリ……

サクツと書き終え、書いた候補者の名前を読み上げる。

「候補1は吉井。そして候補2は明久だ。皆、どちらが良いか選んでくれ」

「ねえ雄二、新一の候補の挙げ方は明らかにおかしいよね？」

「そうか？」

「どうする？どっちが良いと思う？」

「そうだな……どちらもクズには変わりないんだが……」

「どっちのクズを選ばいいか……意外に迷うな？」

「皆っ！真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするな！この人間のクズ共が！」

お前もしっかり『クズ』と言ってるじゃないか。

「投票の結果、明久に決定した。後は2人に任せる」

とりあえず、これで俺の仕事は終わりだ。

我ながら良い仕事をした。

「ほらほら、アキつてば。そんなことより、ウチとアンタでやる」とに決まっただから、前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引いてる気がするよ……」

島田に促された明久は、渋々と前に出て行ったのであった。

因みにな、貧乏くじを『引いてる』んじゃない俺達が明久に『引かせている』んだぞ。

明久達と入れ替わり席に戻る俺と雄二。

「ウチは議事進行をやるから、アキは板書をお願いね」

「ん、了解」

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる?」

さて、Fクラスの奴らからはどんなアイデアが出ることやら……

期待半分の不安半分だな。

清涼祭って何だろう？それって美味しいのか？（後書き）

また・・・更新は遅いですが頑張ります

次回は清涼祭の準備で事件

Aクラスに誘拐される新一

訳も分からず優子から渡されるそれは執事服

Fクラスは一体どうなるのか？

そして・・・新一は学園長から呼び出しが一体何があったのか

すいません・・・調子に乗りすぎました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4044w/>

バカと天才と音楽家

2011年11月20日13時59分発行